

戦後における神道の宗教学的的研究

—研究史序論—

石井 研 士

一 二つの論文

柳川啓一先生は、昭和六一年三月に東京大学を退官され、同年四月より國學院大學文学部神道学科に奉職された。その後先生は、神道そのものを考察の対象として「神道の宗教学的的研究に向けて」^①、「宗教学からみた神道」^②と二つの論文を発表された。先生はそれ以前にも村落社会における講集団の調査研究や山岳信仰、会津田島の祇園祭や秩父の夜祭りなど、祭り研究を通じて神社や神道の問題を扱ってこられた。しかしながら当時の関心の中心は、対象そのものの関心、理解に向けられたというよりは、村落における信仰組織や近代化が宗教に及ぼす影響といった点にあった。それゆえに、調査対象は必ずしも神道に限定されたわけではなく、とくに初期の研究においては、能登の宗教調査のように、寺院だけが調査対象とされることもあった。^③また、社会変動や近代化といった理論的な視野のなかで神道を考察の対象とする場合にも、神道がどのような宗教的特徴をもっているかに焦点をおいて考察

したことはなかった。

上記の二つの論文題目で示されているように、神道そのものに対して学問的関心を抱くようになったのは、國學院大學へ移られてからのことである。神道を建学の精神とする國學院大學の神道学科で教鞭を執ることになったことが、柳川先生の研究領域に新しい分野を開くことになった。

晩年に書かれたこの二つの論文は、相互に関連するもので、「宗教学からみた神道」は「神道の宗教学的研究に向けて」の「その統綱」と位置づけられている。柳川（以下敬称略）は、「神道の宗教学的研究に向けて」において、自身のこれまでの神道学との関わりと宗教学的研究の意味について言及した後、神道の宗教学的研究の開拓者として、加藤玄智と岸本英夫の二人を挙げている。柳川は、両者の神道の宗教上の分類や定義を踏まえながら、自らの神道の把握を試みたことになる。

ここでの柳川の関心は、神道をどのような宗教として分類するかといった、定義の問題に限定されている。しかしながら、柳川のこれまでの宗教研究における学的関心や貢献を考慮すると、これらの論文はたんなる宗教の分類や神道の比較研究の試み以上の意味をもつことになる。なぜならば、柳川は多くの論文において第二次大戦後の宗教と社会変動の問題を論じてきたからである。そしてこの点は戦後の岸本に関しても当てはめることができる。

両者が神道をどのような性格をもつ宗教として把握していたのが、社会変動と宗教との関係の把握に少なからぬ影響を与えている。つまり、神道の定義の問題が、分析に微妙かつ重要に絡むことになるのである。

二 神道界からの期待——戦後の宗教状況の中で

加藤が神道の宗教学的研究の開拓者であるとする、岸本英夫が神社神道と関わりをもつようになるのは戦後の

ことである。岸本は以前から神社神道に関心を抱いていたわけではなかった。よく知られているように、岸本は昭和二〇年の秋、当時の政府と連合軍総司令部民間情報教育局の要請によって実質的な顧問役をつとめ、戦後の宗教行政に深く関わるようになった。^⑦神社の存続に重大な役割を果たした岸本に対して、当時の神社界は少なからぬ敬意を払い、戦後の神社界の在り方について助言を求めた。岸本も求めに応じて、論文や論説などで神社界への提言を残した。

戦後岸本を初めとした宗教学者が神社界に提言を行なうにいたったことには、戦後の神社をとりまく劇的な状況の変化が存在する。昭和二〇年にGHQが発行したいわゆる神道指令によって、神社界は大きな制度的変化を強いられた。神社は他の宗教団体とともに、昭和二〇年に施行された宗教法人令のもと宗教法人となった。国家神道が解体され、人びとの神社を見る目はひじょうに厳しく、神社からは人が遠のいた。^⑧かつては戦勝祈願に、出征兵士の武運長久に殷昌を極めた全国神社の社頭も、一朝にして閑古鳥が鳴き、ペンペン草が生える惨状が続くに至った。^⑨宮地治邦の回想は、ひとり宮地だけのものではなかったであろう。

こうした社会状況の変化は、神道の研究にも大きな影響を及ぼした。政府は昭和二十一年五月一日教職員の適格審査委員会の規定を公布した。文部省による審査の結果、國學院大学は理事、学長が不適格に指定された。昭和二十二年には國學院大学の講師であった小野祖教、岸本芳雄も教職不適格と判断された。それ以前に辞任していた教官も多数おり、制度的に大きな打撃を被った。^⑩

そうしたなかで、従来の学問的在り方に対する真摯な問いかけが生じた。「或る意味では神道の学的体系が、真に批判的な態度に依って要請せられたことは、嘗て無かった」^⑪のであり、「我々は従来の研究態度、方法を素直に反省しつつ謙虚な心にて神道の神髄を学的に探求」^⑫することが必要と考えられた。

西山徳は、当時の神道が置かれた状況を、神道は見失われ、祖国の正しき伝統はまったく忘却の彼方に押しやら

れた観があつたと述懐し、「神道の現実の姿を厳しく直視することから始めなければならない」と述べている。

嘗つて我が国が興隆の一筋道をめぐつてゐた日には、丹念なる実証的研究を経る事をせず、多くの偏見のまじつた、主観の強い神道説が世上に流布せられ、学会に点滅した。……時流の如何に拘わる事なく、過去の偏見にくみせず、先入観をつつしみ、素直に真実の姿を探索すべきであると共に、現在の如き国家苦窮の時に於いても、我々の先祖が嘗々として築いて来た過去の国史を、我々自らこれを継承する者としての真摯なる態度を以て、ふりかへらなければならぬ。かかる立場から、過去の神道学を顧み、今日の神道学の現状を思ふ時、私共の学的態度に於て、方法に於て、大きな脱皮を経なければならぬ点の多々ある事を痛感する。

また田中初夫は、戦後の神道研究の大きな特色のひとつに、政治から離れて純粹に神社神道を考察することができようになった点を挙げている。

明治以後の神道研究が最も困難を感じたことの中に、神道非宗教論や国家神道論などの影響を数へることが出来ると思はれる。それが終戦後色々な障害が一時に解消し、文字通り自由な研究が出来るやうになつたことは神道学の発達のために慶賀すべきことである。最近に於ける民俗学的な研究、心理学的な、或は社会学的な研究、こう言つた新しい研究の目覚ましい成果は終戦前には殆ど予想することだに困難なことではなかつたろうか。

こうした印象をもつたのは西山や田中だけではなかつた。昭和三十一年に刊行された『神道宗教』第一三号には、神道の諸領域における課題が取り上げられているが、田中と同様に神道学の中核をなすような学問領域の研究者から、こうした評価が示されている。河野省三は、神道学の発展にもなつて神道研究の他の側面の組織的学問的考察に若い神道学徒の努力が注がねばならないとして、神道文学や神道考古学の他に、神道経済学や神道社会学を挙げている。

このように、神道研究における他の領域の学問研究に関心が注がれることになったのである。当時求められていた、従来の神道学とは異なった領域の学問のなかで注目されていた研究は、実証的な神社にかかわる研究であった。西山はこの点を次のように述べている。

現代に於ける神道の姿の調査が、比較的新しい学問である宗教学・民俗学・社会学やその他の立場から取り上げられてゐる事は、従来疎かにされてゐた現実についての詳細なる史料を提供するものと大に歓迎すべきであり、その功も亦顕著であつて、今後更にかかる学的調査や資料の蒐集には、神道関係の学者こそつて共に尽力しなければならぬ。¹⁶

ところで、戦後の実証的研究に対する関心は神道学に特殊な傾向というよりは、当時の学問全体の傾向といふことができる。小口偉一は、東京大学宗教学講座の五〇年を回顧して、戦後の宗教研究の特色が実証的研究の確立にあったと指摘している。¹⁷

三 神道宗教学会と宗教学

昭和二三年に神道宗教学会が創設された。神道宗教学会もこうした状況下でのひとつの試みであつた。戦後、神祇院、神宮皇學館大學、国民精神文化研究所、大倉精神文化研究所、日本文化中央聯盟は閉鎖された。東京大学にあった神道研究室も閉室となつた。國學院大学においても「主要な神道研究機関であつた戦前の学部道義学科は事実上消滅の運命にあり、新たに宗教学科を設けて、神道を宗教として講究するために必要な講座の見通しが、漸く立ちはじめたのは昭和二十三年春¹⁸」頃であつた。神道宗教学会は、戦前の道義研究室に代わつて設けられた宗教研究室を母体にして始まつた。

「神道宗教学会」という名称自体にも、苦心が表われている。名付けたのは宗教研究室の主任教授であつた折口信夫自身であるが、戦後の神社神道の置かれた状況を考慮して、神道学会とせずに宗教の文字を入れたのではなかつたのだろうか。

こうした状況下における学的営みは、たんに神道学者による神道研究という領域を超えて、他の隣接諸学からの研究に大きく開かれることになった。神道宗教学会を創設するために送付された発起人懇請状には次のように記されている。

我々は従来の研究態度・方法を素直に反省しつ 謙虚な心にて神道の神髓を学的に探求し、以て學術の進運と世界平和に貢献すべく、茲に広く同士を糾合し學術研究団体「神道宗教学会」(仮称)の組織を計画してをります。^{①9}

神道宗教学会を発会させるための実行委員五名の中に小口偉一が含まれている。また発会の際の委員には、小口の他に、宇野円空、池上広正、堀一郎が入っている。昭和二六年には、さらに岸本英夫と戸田義雄が委員に加えられている。発会記念學術講演会では、折口信夫「神道の靈魂信仰」とともに、宇野円空「本邦に於ける農耕儀礼の研究法に就いて」の講演が行なわれた。宇野の講演は神道宗教学会の機関誌「神道宗教」の創刊号に掲載されている。そして以後、神道宗教学会の學術大会や例会において、小口偉一、池上広正、野村暢清、そして柳川啓一など多くの宗教学者が発表を行なうことになる。

小口と堀の論文が掲載された「神道宗教」は創刊号であるが、その目次は次のようになっている。

発刊の言葉

折口信夫

本邦農耕儀礼の研究法

宇野円空

すさのを

釈超空

宗教学と神道学

小口偉一

神道研究の方法について 堀一郎

折口は神道宗教学会の唱導者で初代の会長である。折口以外に神道学者はいない。²⁰ 宇野の論文は、神道宗教学会の発会記念講演会で行なった講演録である。宇野は冒頭で「本邦農耕儀礼の研究」という講演題目が、主催者からの依頼であったことを明らかにしている。宇野は国内の農耕儀礼に関しては、戦前に調査をしただけで、本格的な国内の農耕儀礼の調査をしたわけではない。宇野は、かつて行なった国内調査を思い起こすままに話を進めていて、必ずしも学術的な考察というわけではない。

この講演において、宇野が結論としたのは二点であった。一点は「同時に南方の一例をお話ししたように、出来るならば他の民族の行き方と比較して行われなければならない」というもので、比較文化的視点の導入を提言している。いまひとつは、研究方法として「所謂科学、宗教学的な行き方が充分あろうと思います」というものである。宇野の言う科学的の意味が、この論文では述べられていない。しかし、民族学における比較の重要性を強調していることから判断すると、自国の文化だけを対象とせずに、客観的に他民族の文化との比較を意味しているように思われる。「吾々が今日常識で意外としてゐるような面が掘出される。そして同時にこれが日本民族の一面の特徴を示してゐると同時に或る点で共栄圏の民族に於いて見出すことが出来るといふふうに考えて」みる事ができないかと指摘している。²¹

タイトルの通り、宗教学と神道学の問題を扱った小口の論文は、宇野と同様の点を指摘している。小口は、対象によって神道学や仏教学、あるいはキリスト教学といった学問が成立しているが、「これらが、純粹に客観的な立場に立つ経験科学としての宗教学の立場よりは、むしろ多くの場合、神学的な色彩の濃厚な学問となつてゐる。……このような態度は、学問的態度としては全く誤つてゐるといはねばならない。……従来の神道学は、神道の歴

史的研究としての神道史を除いては、大部分が神道神学であつて、いはば学問の出発点において方向を誤つてゐたと述べている。さらに小口は次のように提言している。神道学もしくは神道宗教学の名称の明示するところは「経験科学として出発せねばならぬことであり、この意味においても、従来の多くの神道研究の非科学性を放棄せねばならない」。神道学は広い視野をもつことが要求されるのであり、「神道学が、国学と呼ばれる古典学、国史学、道義学等々の範囲のみで可能だといふようなことは、もはや何人にも考えられないであらう」。そして、「神道学は、宗教学の一つの重要な分野として、正しい意味での学問的發展をなさねばならぬことを強調しておきたい」のであつて、東洋学との関係において出発すべきだといふ。さらには、神道学は仏教学とともに実証的な調査研究に關して最も大切な役割を担うものであると述べている。

また堀一郎は、神道の研究が孤高を守ることに徹してきたのであり、無批判な隱遁主義であるかぎり明日の繁栄は望めない、と比喩的に指摘している。「神道はこれを國民多數の信仰事實に基づいて先づ以て実証的に、且つ機能的に把握せられねばならないのである。……神道の全的把握の前提に、我が國民信仰の全様相を公正素直に觀察し理解することが望ましい」といふ。堀は神道の全的把握のための研究方法として六つを挙げている。歴史学的方法、文化史学的方法、古典および言語による研究方法、民俗学的方法、そして宗教学的方法、哲学的方法である。堀のいう宗教学的方法は次のように記されている。

今日の宗教学は、むしろ実証的方法論において多岐なる發展を遂げつつある。而して神道を説明する為には比較宗教学或は宗教民族学、宗教心理学、宗教社会学と言つた方法により出来うれば周圍民族との類型を辿り、その比較と分類によつて儀礼や習俗の原初的な意義と發達の経路を明らかにし、併せてその背後の思想とその信仰變遷の跡を説明することが望ましいと思ふ。

三人の宗教学研究の学風は、必ずしも同一ではない。それにもかかわらず神道学への指摘には共通した姿勢を

うかがうことができる。

四 岸本英夫の神道理解

これまでみてきたように、戦後の一定時期、宗教学が神道研究にさまざまな形で貢献することが期待されていたのであり、そうした要求に対する対応が可能であつたように思う。

よく知られているように、岸本は宗教の定義に並々ならぬ意欲を示した。断片的ではなくまとまった形で宗教の定義を扱った初めての論文は、昭和二六年に書かれた「宗教現象とは何か」である。ここでの考察は、「宗教の定義をめぐる諸問題」(文化序編、昭和三六年三月)を経て、「宗教学」(大明堂、昭和三六年六月)として結実した。

柳川啓一は、岸本が神道をどのようなものとして考えていたのかを、岸本が「宗教学」で示した三つの信仰体制を手がかりに考察している。岸本が示した三つの信仰体制とは、「暗願態」「希求態」「諦住態」のことである。「暗願態」は、「御利益信仰的な通俗信仰の基盤になる信仰体制」であり、素朴な信仰といふことができる。高度に洗練されているようにみえる信仰のなかにも、この類型に属するものが多いと指摘されている。「希求態」は、「超自然的な力に解決を求めるよりは、自分の行動自身の中にある意味や価値の方が重要になってくる」といった宗教的な価値体制の再編成が生じるような信仰の在り方である。「宗教学」には事例として天理教と金光教が示されているが、柳川は岸本がこの類型の宗教としてキリスト教と一部の仏教を例としてしていると述べている。三番目の類型の「諦住態」は、「日常的な価値は、そのままに受け入れながらこれに加うるに、それよりも高い次元の価値を見出して、その中に住するのである」と述べられた。岸本はティリッヒの神学、禅家のさとり、親鸞の絶対他力による救いを典型とみている。

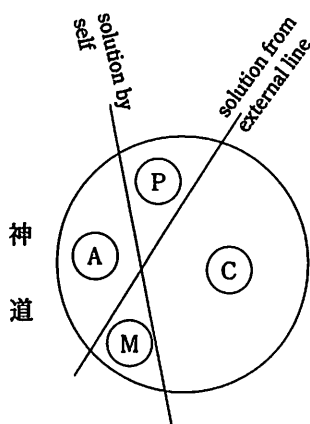
岸本がこの分類のどこに神道を位置づけていたかは明らかではない。岸本が戦後間もない時期から神社神道に深い関わりをもち、多くの提言をなしてきたことはすでにみた。それゆえに、定義の分類の際に、どの領域に神道が含まれるべきかは当然ながら念頭にあったと考えていいだろう。柳川はこの点について、明示されてはいないが「祈りの宗教」として「齋願態」の例のひとつと考えていたのではないかと指摘している。²⁶

『宗教学』を著した時点での岸本は「齋願態」「希求態」「諦住態」に発展のプロセスを考えていた。信仰は磨くことができないものであり、「齋願態」「希求態」「諦住態」の順に段階的に進展していく性格をもっていた。²⁷岸本の死後刊行された岸本英夫編『世界の宗教』（大明堂、昭和四〇年）の高木きよ子「総説」によれば、岸本はその後以上の三つの信仰体制の他に、新たに「融合態」という分類を設けたことがわかつている。柳川はこの「融合態」こそが、世界の宗教における神道の位置づけを、岸本自身が見出したと考えて設けた信仰体系の一類型であると指摘している。²⁸

「融合態」とは次のような信仰体制である。

人間の問題の解決が、日常の問題をはなれて、深い境地で把握するようになる形態のものがある。自分と、宗教の対象を一致させ融合させることによって、そこに限らないよろこびをえる。宇宙の本体ともいべきものに、個である自分をまったく投入させ、究極的なやすらぎを見出す。この形態では、自我、自意識をすべてせることによって、問題の解決をはかり、そこに、究極的な意義を見出す。今までにない特殊な体験領域が展開するのである。²⁹

柳川は、岸本が神道を「融合態」に分類している根拠として、岸本の最後の論文を挙げている。この論文は「神道の都市化」と題された論文で、昭和三八年に執筆されている。³⁰この論文の中で岸本は、神道を「自然的神秘主義」と規定している。



P (Petitional) : 請願態

A (Aspirational) : 希求態

C (Communional) : 融合態

M (Mystical) : 諦住態

神道は明らかに神秘的宗教である。日本人は自然に戦を挑んだり、自然を征服しようとしたことがなかった。したがって神道は、農耕習俗と密接に結びついた宗教行事を伴う、強い自然的神秘主義の傾向を呈示している。⁽³¹⁾

岸本が神道を「融合態」に分類していたことを、戸田義雄も指摘している。「神道の都市化」が発表される前年の昭和三七年、戸田は岸本がハーバード大学の関係学者に特別セミナーとして宗教の分類を講じた顛末を記している。⁽³²⁾ 岸本は次のような図を参加者に示したという。

神道は明らかに「融合態」として分類されており、「自己以上により大きなものに自己を没入させることによって、問題解決を図る没我型」であると戸田は指摘している。⁽³³⁾

柳川と戸田の指摘に従えば、岸本の神道観は、晩年になって宗教の定義をめぐる問題のなかで「融合態」として結実したことになる。

しかしながら、岸本の文献を丹念に、神道観を中心に追い求めていくと、戦後のかなり早い時期から、神道を「融合態」として把握していたことがわかる。たとえば、『神道宗教』第二号（昭和二十四年二月）の「座談会 神道の諸問題」のなかで、神道を「つながり」という言葉で捉えて次のように述べている。「あそこへ行くと、つながりの自覚を与えられる。自分は過去から現在未来への長いつながりの中の一環であるとい

ふことの自覚をさしてくれる。横の社会的なつながりの自覚もあるが、それと並んで縦の関係が強く意識される。断片的な個々の事実を超えた永遠の意味を発見するといふ働きです。その働きが、少なくとも今日に於いて神社が民衆の精神生活を現実に豊かにしている一つの点であると思ふのです」と述べている。

この「つながり」という神道の捉え方は、「神道の都市化」においても明確に述べられており、その連続性を読み取ることができる。

「融合」という宗教類型は、戦後の早い時期から、明確な類型という形で認識されていなかったとしても、岸本の神道理解にはすでに存在していたと考えられる。この点はきわめて重要な事実として留意されなければならない。なぜならば本論文の冒頭で指摘しておいたように、岸本は社会変動と神道の関係をも問題としているからである。

五 岸本の社会変動と神道

いまここで岸本の宗教の類型化と社会変動の關係の全体を詳述するだけの余裕がないので他の機会に譲ることにしたいが、晩年に「融合態」として把握された神道と社会変動との關係の問題点を指摘しておきたい。

先に柳川が、岸本が神道を「融合態」として把握していた証左とした論文は昭和三八年に書かれた最晩年の論文であった。「神道の都市化」という論文のタイトルから明らかなように、社会変動としての都市化と神道との關係が考察されている。

岸本は、「神社神道にとって、都市化への直面ということとは、日本の仏教やキリスト教の場合とくらべて、遥かに重大な問題」であり、神社神道の基本的な本質に関わる問題であると述べている。それは神社神道が、農耕的伝

統に深く根ざした日本の農村の土壌に育ち、自然との調和を重んじる日本の伝統的文化と密接に関係するためである。岸本は農村において神社が果たした伝統的な役割として次の三点をあげている。

1 村の守護神が鎮座するところとして崇敬される。

2 境内は全村民が年ごとの祭を行なったり、他の重要な出来事の際に集まる聖なる共同体の中心である。

3 村人の精神的な「故郷」(Heimat)であり、一身上の問題に直面したときに一人静かにものを考えるところ、先祖から受け継いだ血と文化の長い鎖を心に感じる所である。

しかしながら、こうした神社神道は都市化の影響を受け、従来の神社の基盤は危機にさらされている。それは氏子組織の崩壊あるいは氏子意識の希薄化となって現われている。岸本は、大都市における人口の移動性の高さゆえに、「地縁」または「血縁」の意識が弱まり、都民と神社の紐帯が弱化的ることによって氏子組織の崩壊が始まっていると指摘している。

岸本は考察を進めるうえで、具体的な調査を行っていない。神道が都市化によって大きな影響を受けたと述べるものの、具体的な地域調査の結果から氏子組織の崩壊を指摘しているわけではない。都市における人口移動の高さと神宮大麻の配布率との関係から結論を引き出しているだけである。

六 神道の実証的研究

先にみたように、戦後の宗教学の神道学への貢献が実証性にあるとすれば、実際にどのような研究が行なわれ、寄与したのだろうか。

柳川は、戦後行なわれた宗教の実態調査を鳥瞰する論文を書いている。³⁵ この論文で扱われているのは、現在活動

している状況の調査、科学的方法もしくは科学的叙述をもった報告、具体的事例に関するモノグラフ、記述以上の分析が含まれていることなどを基準としている。そして柳川は、概説、俗信、神社神道など領域を一二にわけて解題を付している。この分類中の「IV神社神道」には次のような一九点の論文が掲載されている。

- 1 堀一郎「日本宗教史における交通の問題」昭和二八年
- 2 宮地治邦「島根半島における神社祭祀の研究」昭和二九年
- 3 松平齋光「祭——本質と諸相」昭和二二年
- 4 沼沢喜一「四県神社の豊年祭」昭和三二年
- 5 西山徳「神を迎ふる行事」昭和三二年
- 6 櫻井勝之進「阿蘇神社の田作祭」昭和三二年
- 7 伊藤幹治「奄美の神祭」昭和三三年
- 8 北原真智子「双分制の一例——滋賀県中山の芋まつり」昭和三二年
- 9 萩原龍夫「典型的な宮座」昭和三四年
- 10 大越勝秋「和泉の宮座の分布」昭和三二年
- 11 森岡清美「村落の階級構造と宮座」昭和二九年
- 12 和歌森太郎「宮座の解消過程——奥能登の頭屋制を中心として」昭和三年
- 13 池田昭「株座の解体過程——京都市左京区八瀬」昭和三三年
- 14 佐藤重成「浅草の変遷」昭和三二年
- 15 森岡清美「北海道篠津兵村の展開と村落構造——祭祀組織を中軸として」昭和三二年
- 16 ロナルド・ドーア「都市の日本人」昭和三三年

17 林稲苗「山村における宗教意識の性格」昭和二九年

18 原田敏明「オハケを訪ねて」昭和三十一年

19 土岐昌訓「明治以降における神社整理の問題」昭和三十三年

柳川は可能なかぎり網羅的に蒐集したと断っているが、一五年間に及ぶ神社神道に関する実証的な調査研究は少ない。執筆者をもても、宗教学を専門とする研究者はさほど目立たない。神道研究における実証的な調査研究が本格化するのには昭和三〇年代後半からである。

七 岸本と「近代化と神道」

岸本は、たんに論文を公表するだけではなく、神道の宗教学研究の制度的母体となった國學院大学日本文化研究所の設立とその後の運営に大きな影響をもたらした。

日本文化研究所は昭和二六年、占領からの独立を回復したにもかかわらず、従来の社会組織と価値観の崩壊による混乱から脱却できないでいた時期に設立された。國學院大学は当時、新学制への切り換えや大学院の設置などによってしだいに学内が整備されつつあった。石川岩吉学長（当時）は「建学の精神を継承して従来の学問伝統を展開させるため、学部における研究・教育の拡充と平行して、新たな調査研究機関の設立を希望していた」²⁰。当時大学院を担当していた岸本英夫は、柳田国男や河野省三らとともに、学長から設立を諮問された。岸本を通じて、ロックフェラー財団から三千ドルの欧文図書購入費寄付が行なわれた。また、採択された研究所機構は岸本の案によるものであった。²¹

昭和三八年、岸本の提案と指摘のもとに「都市化と神道」のプロジェクトが開始されている。岸本英夫は昭和三

九年に他界したが、このプロジェクトはその後「近代化と神道」として拡大され、昭和四〇年代に大きな成果を残した。昭和四〇年には第一回国際神道会議がクレアモントで開催され、四二年には第二回国際会議が東京で開かれた。両会議において「近代化と神道」の部会が設けられ、柳川啓一、平井直房らが研究発表を行なった。

しかしながら、これらの研究をみるときに、神道をどのように捉えるかで結論が大きく異なっていることがわかる。国家や社会、あるいは地域共同体の宗教として神道を把握した場合と、個人の日常生活における現世利益的側面とのつながりを強調する場合とは、おのずから社会変動との関わり方が異なり、その結果、結論が違ってしまいうことになる。

社会変動にともなう神道の変化を理解しようとするときには、神道をどのようなものとして措定し、両者の関わりを設定しているかに留意しなければならないのである。

冒頭で引用した二つの論文の中で、柳川啓一は、二人の先駆者加藤玄智と岸本英夫の神道理解を考慮しながら、新たな神道の宗教学的的位置づけの試みを行なっている。宗教が人間の行動に対してもつ規制力を「タブー」「戒律」「道徳」という三種類に区分したとき、神道はタブーを重視する宗教として考えられると述べている（「神道の宗教学的研究に向けて」）。そして続編として書かれた「宗教学からみた神道」では、タブーとしての指導理解を浄／不浄（聖／俗）二元論による理解へと発展させている。

残念ながら、神道の理論的把握に関する考察はここで終わっている。柳川先生が神道の宗教学的的位置づけを試みたのは、直接的には國學院大学で教鞭を執られたことによるものである。しかしながら、それまでの先生の研究領域や学問関心をみたときに、先生の意図はたんなる神道の定義の問題にとどまるものではなかったはずである。浄／不浄の二元論から理解された神道が、社会変動のなかでどのように変容したのか、それとも変容することはなかったのか、それはなぜなのか。ともすれば、現代社会を映す鏡として新宗教研究に大きな関心が注がれてきた一方

で、伝統宗教として改めて考察の加えられることの少なかった神道への着目は、現代社会と宗教との関わりを考察するうえで、大きな視野を広げたはずである。

戦後の社会変動と宗教との関わりの全体を把握する作業は、われわれの責務である。

注

- (1) 柳川啓一「神道の宗教学的的研究に向けて」、『國學院雑誌』第八九卷二一號、一二九—一三九頁、昭和六一年。
- (2) 柳川啓一「宗教学からみた神道」、『明治聖徳記念学会紀要』復刊第一號、一九頁、昭和六三年。
- (3) 柳川啓一「能登の宗教」、『人類科学』六號、一五九—一七頁。
- (4) たとえば「伝統社会の崩壊と宗教」柳川啓一編『現代社会と宗教』東洋哲学研究所、昭和五三年のように、社会変動と宗教との關係を考察する場合にも、神道は仏教とともに伝統宗教として扱われているだけである。
- (5) 「神道の宗教学的的研究に向けて」は、神道学者の安津素彦の逝去に伴う特集号への寄稿である。國學院大學に奉職したことが論文執筆の動機のひとつになったものと考えられる。
- (6) 柳川啓一、前掲「宗教学からみた神道」四頁。
- (7) 詳しくは「風の中の神社神道」岸本英夫集第五卷 戦後の宗教と社会 溪声社、昭和五一年参照。
- (8) 宮地治邦「戦後十年の神道界を顧みて」、『神道宗教』第一〇号、昭和三〇年、三七頁。
- (9) 國學院大學校史資料課「國學院大學百年史」下巻、平成六年、一〇二六—一〇二七頁。
- (10) 「編輯後記」、『神道宗教』第一号、昭和三三年。
- (11) 「編輯後記」、『神道宗教』第二号、昭和三四年。
- (12) 「西山徳氏インタビュー」、『東京大学宗教学年報X(別冊)』東京大学宗教学研究室、平成四年参照。
- (13) 西山徳「現今に於ける神道学の課題」、『神道宗教』第一三三号、昭和三十一年、三三三—三四頁。
- (14) 田中初夫「古典神道学について」、『神道宗教』第二三三号、昭和三十一年、二五頁。

(15) 河野省三「神社研究の組織と推進」『神道宗教』第一三三号、昭和三十一年。河野の構想する神道社会学は、同じ論文の後段で、「神道社会学」と言い換えられている。この領域で扱う研究対象として年中行事、神事習俗が挙げられており、「神社の経済生活」で扱う交通、産業、都市、部落の面を合わせるも可とされている。

(16) 西山徳「現今に於ける神道学の課題」『神道宗教』第二三三号、昭和三十一年、三四頁。

(17) 小口偉一「宗教学五十年の歩み——東京大学宗教学講座創設五十年を記念して」『宗教研究』第一四七号、三三五頁。戦後の宗教学と特徴については、田丸徳馨「日本における宗教学説の展開」『坪井俊英博士頌寿記念 仏教文化論』昭和五十九年参照。

(18) 平井直房・上田賢治「学会十年の歩み」『神道宗教』第一三三号、昭和三十一年、一四一頁。

(19) 同、一四二頁。

(20) この時期に神道学者が名を連ねなかった理由のひとつに、先に記したように、戦後の神道学者の公職および教職追放令によるバジがある。小野祖教は神道宗教学会三〇年の思い出に寄せた文章の中で、自らのバジに言及している。小野は昭和二二年にバジにかかり、終戦と同時に教授から講師に降格された。その結果、神道宗教学会の創立に関わらず、自ら委員を降りたという（小野祖教「三つの問題」『神道宗教』第八十四・八十五号、昭和五十一年）。

(21) 宇野円空「本邦農耕儀礼の研究法」『神道宗教』創刊号、昭和二十三年、二〇頁。

(22) 小口偉一「宗教学と神道学」『神道宗教』創刊号、昭和二十三年、二四頁。

(23) 堀一郎「神道研究の方法について」『神道宗教』創刊号、昭和二十三年、二九頁。

(24) 同、三三頁。

(25) 『宗教研究』一二八号、昭和二十六年、一一二六頁。

(26) 柳川啓一「神道の宗教学的的研究に向けて」『國學院雜誌』第八七卷第十一号、一三三頁、昭和六一年。

(27) 岸本英夫「宗教学」大明堂、昭和三十六年、四〇—四一頁。

(28) 柳川啓一前掲論文、一三二頁。

(29) 高木きよ子「総説」岸本英夫編『世界宗教史』大明堂、昭和四〇年、七頁。

(30) 岸本は秋にオハイオ州ヒブル・ユニオンで開催された「近代化と宗教の研究集会」に参加し発表するはずであったが、激しい頭痛のため参加できず論文は代読された。『岸本英夫集第五巻 戦後の宗教と社会』溪声社、昭和五十一年に収録されている。

- (31) 同、一七一頁。
- (32) 戸田義雄「岸本英夫」、『神道宗教特集号 神道の研究——方法と業績』第四一号、昭和四〇年。
- (33) 同、一八三頁。
- (34) 岸本英夫「神道の都市化」、脇本平也・柳川啓一編『岸本英夫集第五卷 戦後の宗教と社会』、溪声社、昭和五十一年、一六九頁。
- (35) 柳川啓一「宗教調査の現状」、文部省調査局宗務課「戦後における宗教調査の現状」、昭和三十五年、一五四五頁。
- (36) 國學院大學日本文化研究所「國學院大學日本文化研究所概要」、昭和五〇年、五頁。
- (37) 同、六七頁、國學院大學校史資料課前掲書、一六二三頁。
- (38) 『第二回神道研究国際会議記録』國學院大學日本文化研究所、昭和四三年参照。